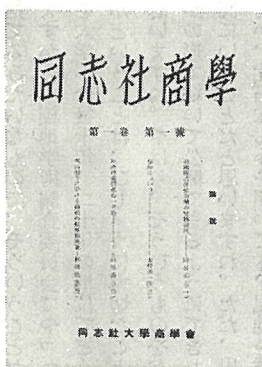


『同志社商学』



同志社商学は「同志社大学商学会」の機関誌である。商学会は商学部専任教員を中心とし、商学部学生も包含する専門的研究会であるから、同志社商学の主内容は経営、会計、商業、貿易、経済の諸分野にわたる研究論文

である。商学部の創設は昭和二十四年であるが、それと同時に商学会も創設された。同年九月には創刊号が発行され、以後すでに二十六巻を数えている。第一巻から第三巻までは年四回、第四巻からは年六回の発行を続けている。

明治四十五年に創設された同志社大学は専門学校令による大学であったが、大正九年に大学令による大学に変わった。そこで、それまでの大学は同志社専門学校と改称され、大正十二年に神学部、英語師範部、政治経済部と並んで高等商業部が増設された。この高等商業部は、昭和五年に岩倉校地に移転し、昭

和六年に同志社高等商業学校となり、さらに第二次大戦中の昭和十九年に同志社経済専門学校と改称された。

第一次世界大戦によって日本経済は急激に成長した。この新しい経済を運営するには新しい人材が要求される。その時流に乗って、高度の商業教育機関としての同志社高商は、やがて関西における私立高商の名門といわれる実質を具えるに至った。この発展の基礎となったのは教授陣の充実とアカデミックな雰囲気であり、この一翼を担ったのが専任教員を中心とする研究団体である同志社高商（経専）学会であり、その機関誌である同志社高商（経専）論叢であったのである。商学会と同志社商学はその伝統を直接に受けつぐ後継者であった。

昭和二十四年に商学部は創設されたが、これはすんなり創設されたのではなかった。六三制といわれる新教育制は昭和二十二年から実施された。同志社では昭和二十二年に新制大学設立準備委員会が作られ、筆者もその委員の一人であった。そこでは神・文・法・経の旧制大学を基礎とする四学部は二十三年から開設することがきまったが、経専を基礎と

する商学部と工専を基礎とする工学部については、さまざまな異論が出された。商学部については「商学部という学部はありえない」とか「専門学校教員は大学教員の資格がない」などというような、非常識な議論さえ平気でなされる始末であった。

だから一年おくれで商学部が発足したとき、商学部スタッフの学問に対する態度は、きわめてきびしいものであった。その熱情をぶつけたのが商学会であり、同志社商学であったのである。このことは同志社商学の創刊号に載せられた次のような発刊の辞に現われている。

「本学会は商学研究の学術団体として、学問を基盤とする大学の存在理由を明らかにする責任を担っている。本学会の機関誌としてここに同志社商学創刊号を世に送ることは、商学部の開設を支持された世論に応えるとともに、われわれの学問的努力と精進を問うことにはかならない」

文章は練れていないが、新学部の新興の意気をはかっていることができる。昭和二十五年には同志社商学第二巻第二号を、商学部専任教員全員の執筆による一周年記念論文集として

発行したが、次のような序文にも以上のことははっきりと現われている。

「思うに、比叡山麓、岩倉の地において、永らく経済人育成のために、特異の学風を創造してきた同志社経済専門学校（元同志社高等商業学校）が、学制改革を機として、各方面のご援助のもと、多数の優秀な教授を加え、商学部として同志社大学の一翼を担うに至り、本年七月には学生の父兄、経専（高商）卒業生らの厚意により、新たに商学部研究室も竣工し、秋にはさらに教授陣を強化するなど、内外の努力が相俟って商学会もようやくその出発点をえた観がある。いうまでもなく、商学はその学問的な伝統も古く、したがって商学を研修する学会もまた古くから数多く存在しているが、同時に今日ほど、その伝統に対して強い反省が要求せられたこともあるまい。それは実証科学としての商学の、よりいっそうの発展を契機づけるものであるが、その過渡期をつらぬく動揺と混乱もまた特徴的である。」

本学会も発足以来、すでにそれらを経験し、みずから脱皮に努力しつつある。本記念論文集も、いわばその迂余曲節の道程におけ

る一つの道標であり、また動揺と混乱をも、それなりに表わしているかもしれない。やがて、それらはより一そう高い段階において整理され、体系化されるであろうが、そのためにも現実的基盤としての経済界との連繫を絶えず強化するとともに、体系化の場としての他の諸学会との学問的協業を、より密にすることに努力しなければならぬ。同志社商学は、いわばその一つの道具といえる」

これは商学部創設の主役であり、初代商学部長であった故島本英夫教授の書かれたものであるが、実証科学としての商学というキャッチフレーズで、その存在理由を明らかにしようとした当時の事情を、反映している。同時にまた、これは同志社商学の発足から今日まで持ちつづけている特徴でもある。

商学会は昭和二十八年に創立五周年記念論文集を、昭和三十三年に十周年記念論文集を発行した。昭和四十三年には、さらに二十周年記念論文集が発行された。その序文には、

「顧みれば、敗戦の傷がまだ癒えぬ混乱の最中に、商学・経営学の領域に新風を吹き込み、さらには民主主義の地についた発展と国際的な平和に寄与し、わが国再建と新しい進

歩に貢献しうる良心的な人物を養成しようとする理想のもとに商学部が設置された。以来、幾多の畏敬する先輩のもと、また輩出する新進気鋭の若手諸教授の熱情に支えられて、大学院商学研究科修士、博士両課程が相ついで設置された。かくして後継者養成の道が開かれるとともに一般教育関係の陣容もしだいに強化され、ここに名実ともに学問の府としての体制の基礎がつくられた。現在では多くの本学大学院商学研究科出身の若手研究者が、教授会の席を埋めるようになってきている。これは創立二十周年にさいして、慶賀すべきことといえよう。

しかしながら、学問の進歩は日を追って著しく、その道をきわめることは容易ならぬものがある。加えて、今日提起されている教育、研究上の諸問題は、われわれに新たな大学像の構築を要請している」

とある。これは昭和四十三年の、いわゆる大学紛争のときに書かれているために、特殊な感情がバックになっているが、これらの序文を通じて、商学部あるいは商学会、それにつながる同志社商学の歩いた道をたどることができる。

(平山 玄・大学商学部教授)

文 論

一席

該当者なし

「百周年を迎えるに当って私は思う」

吉川 和正(部 大学法学 学生)

「同志社の良心教育」

高橋 勝(校 友)

「真実の心」

本井 康博(校 友)

「百年を迎えるに当って私は思う——国の良心の養成から世界の良心の養成へ——」

池平 正治(部 大学文学 学生)

「大学の像——大学のあるべき姿を求めて」

金山 直樹(部 大学法学 学生)

創立百周年記念懸賞作品

入 選 表

秀作

「御所にて」

神崎 順一(校 友)

「天真爛漫」

久永 省一(中学校 友)

「喫茶店にて」

神崎 順一(校 友)

「楕円球のボールを追って」

久永 省一(中学校 友)

「新島先生日本脱出」

米田 吉伸(学部 大学経済 学生)

* 先に募集された、創立百周年記念懸賞作品には多数の応募があったが、選考の結果、掲載の通り入選者が決定した。
なお、入選者授賞式は、三月二十四日、アームストロング館で行われた。

記 念 歌

一席

「同志社創立百周年、祝歌」

野村 芳雄(教 女子中高 諭)

二席

該当者なし

「同志社創立百周年記念祝歌」

上野 イト(高 女子中高 諭)

「同志社大学追遠歌、四季京洛」

秋月ともみ(校 友)

「同志社追遠歌、同志社若者」

桑原 敏子(部 大学文学 学生)

「同志社創立百周年記念歌」

内田龍太郎(部 大学文学 学生)

標 語

一席

「新島を世界に生かせ同志社人」

二席

重松証太郎(校 友)

三席

「同志社百年 平和の元年」

佐々木優子(校 友)

「新島精神 同志社進んで百周年」

浜岡 雄一(校 友)

「真実に若き気迫の同志社人」

小田 聖樹(学部 大学経済 学生)

「同志社の 京都の 日本の 誇り」

岩原 文男(校 友)

「昨日も今日も明日も 一隅の光 同志社」

竹内 佳之(校 友)

「百年と思えば長き年月ぞ 育てよ同志社 わが母校」

近藤 俊之(学部 大学経済 学生)